実践報告

Can-doをベースにした短期留学生の日本語プログラムにおける実践

―ビデオ制作の活動を通じて―

飯塚　真央・衣川　明沙
ブエノ ダ シルバ ジュニオル・アントニオ マルコス

要　旨

報告者は、早稲田高校において、オーストラリアからの短期交換留学生に対する日本語プログラムを担当した。４日間の授業では、学生が日本での体験をビデオで伝えられることを「大きなCan-do」として設定し、各日程の「小さなCan-do」を達成していくことで、目標を達成することができた。本稿では、プログラムの概要を報告するとともに、報告者が学んだことについて述べる。

キーワード
Can-do　年少者の日本語教育　短期留学生　ビデオ制作

１．はじめに

国内や海外において年少者日本語教育の様々な実践が行われている。日本語を通じて、言語以外の能力を育成するためのアプローチは近年普及していると考えられる。そこで、教師は言語の指導だけでなく、学習者がクラスメイトと楽しみながら、交流する中で、態度や価値観、文化などについて学べる活動を提供する役割をもっているといえる。

このような活動を考えるために、教師が教育機関の方針や学習者のニーズに合わせ、教室以外の社会とつなげる活動を授業で行うことは、その事例の一つとなる。本稿では報告者が早稲田高校とメルボルン・グラマー・スクール（以下MGS）と行った４日間の短期留学（日本語プログラム）での実践の概要を報告するとともに、実践者として学んだことについて述べる。

２．実践の概要

2.1　早稲田高校とMGS

早稲田高校とMGSとの短期留学は2003年に開始した。10年の間に新型コロナウイルスの影響で中止となっていた期間もあったが、2023年８月に再開した。この交流プログラムでは、日本人の学生はオーストラリアを訪れ、MGSで活動に参加し、MGSの学生も来

日し、日本で様々な場所を訪問したり、文化体験をしたりする。そして、MGSの学生がオーストラリアに帰国する前に早稲田高校で日本人の中高生と交流する期間もある。そこで日本語の授業も取り入れている。

今回は４日間で９コマのレッスンが行われた。そこで、MGSから15歳から17歳の25名の学生が来日し、日本語能力のレベルにあわせて、３つのクラスに分けられていた。クラスが３つあったため、それぞれの教師が１つのクラスを担当した。

2.2　授業の狙い

本プログラムを実施する１ヶ月前に打ち合わせや早稲田高校への訪問を行い、ベテランの先生方の経験を聞き、様々な提案やアドバイスをもらえた。その中で、学校側から会話や聞き取りの練習の比重を大きくするという要望があった。そこで、報告者は学生が知的な楽しさを感じられる活動で、会話や聞き取りを行いたいと考えるようになった。来日したら、日本でしかできない楽しい活動ができれば、学生にとっていい思い出を作れると考えた。

クラスは、学生の日本語レベルによって３つに分けられていた。AクラスとBクラスのレベルはあまり変わらず、漢字も読める、身近で簡単なやりとりができるクラスだったが、Cクラスはひらがなとカタカナが読め、自己紹介や挨拶ができる初級レベルだった。レベルが異なったため、学生たちがもっている日本語に関する知識を通して、活動ができれば効果的だと思い、Can-doベースにカリキュラムを作成することを目的とした。

中島・末永（2018）では子どもCan-doを開発し、その中で学校の方針と日本語の授業に一貫性を持たせるため、「大きいCan-do」と「小さいCan-do」を設定することを提案している。大きい目標から各授業における具体的な行動を考える必要があり、「大きいCan-do」と「小さいCan-do」を設定した。

これらの目的を達成するために、学生の現状を考え、ICTやSNSを使った場面を設定し、日本で体験したことを帰国後に思い出すため、そして家族や学校の後輩に見せるためのビデオ制作を大きいCan-doとした。その大きいCan-doを達成するために、４日間で小さいCan-doとして、友達を紹介したり、日本で面白いと思ったことや驚いたことを共有することを設定した。また、会話や聞き取りの機会として、それぞれの教師が各クラスで様々なグループディスカッションの機会を設けた。

2.3　プログラムの流れ

４日間の授業では、最終日のビデオ発表に向けて、段階的に準備を進めていくような構成にした。１日目のみ教師３名と学生25名全員で同じ教室で活動をした。そこで、教師を知るためのクイズをし、学生が各自で自己紹介を行うのではなく、ペアのクラスメイトを紹介してもらうことにした。ここでの狙いは、お互いを知ることだった。２日目から各クラスに分かれた。２日目は、マインドマップを用い、日本での滞在中に興味を持ったことや面白いと思ったことを書き、グループで共有した。それを基に、各自ビデオのテーマを決め、何を話すのかを整理した。３日目では、実際に決めたテーマについて、どうやってビデオで作成するのかを考え、グループでアイデアを共有した。どんな日本語が使えるの

かを考えるために、スクリプトを作ってみる活動も取り入れた。最終日の４日目には、グループでビデオを発表した後、短期留学全体のふり返りを行い、家族や友達に共有したい日本で体験したエピソードなどについて話した。そのほか、全日程を通して、「ホストフレンドと話そう」という課題を出し、事前に用意した質問にインタビューをしてホストフレンドを知る活動を行った。

表１　４日間のCan-doと内容

「大きいCan-do」：日本で体験したことをビデオで伝えることができる		
日程	「小さいCan-do」	内容
１日目	友達を紹介することができる	先生に関するクイズ ペアを紹介する
２日目	興味を持ったことを紹介することができる 自分のビデオのテーマを決めることができる	面白いと思ったことを共有 ビデオのテーマを決める
３日目	ビデオを作成することができる	ビデオのアイデアを共有 スクリプト・ビデオを作成
４日目	ビデオを見せて、コメントや質問に答えられる ビデオを見て、質問やコメントができる	ビデオ発表とコメント ４日間のふり返り

2.4　授業の工夫

2.4.1　教材作成

教材作成では、学生が自分のアイデアや表現をメモできるようにするのを意識した。グループで話し合い、メモを書いていくことで、ビデオのテーマについて日本語で表現できることを狙った。ただし、日本語でメモを書くことが難しい初級レベルのＣクラスには、表現チェックシートを配り、サンプルビデオを見ながら出てきた表現を書けるように工夫した。また初日にはCan-doチェックシートを配布し、授業の最後にふり返りを行えるようにした。

2.4.2　ビデオ作成

ビデオの作成と発表で工夫した点は３つある。１つは事前に教師がサンプル動画を作成し、学生がビデオ作成する前に、見せながら説明をしたことである。写真や動画をつなげてビデオを作成する際、録音した日本語の音声を加えることができるだけでなく、写真に日本語で文字入れした例を提示した。２つ目はビデオを作成する際のアプリケーションを指定しなかった点である。学生は自分のスマートフォンやパソコンで作成し、各自使い慣れている編集アプリを使い、個人作業であってもお互いに助け合いながら作り上げることを狙った。そして３つ目は、発表の際にポストイットを用いて、お互いにコメントを記入した点である。口頭でコメントをもらうだけでなく、書いてもらったポストイットを各自のシートに貼ることで、自分の作成したビデオの良かった点と課題を１枚にまとめることができた。発表は４名程度のグループ内で行い、授業時間内でメンバーをシャッフルして、できるだけ多くの学生からフィードバックが得られるようにした。また作成したビデオは共有ファイルに投稿し、クラスに関係なく、全員がビデオを見て振り返ることができ

るようにした。

2.4.3　教師の心構え

教師はファシリテーターとしてグループ活動を活発にさせることを意識した。教師からビデオ作成のアイデアを提示するのではなく、学生同士でアイデアを出し合い、どのようにして日本語でビデオを作れるのかを考えさせる問いかけが必要だからである。特にビデオ作成に向けて、学生が興味を持ったことについて話し、どんな動画にしたいのかをグループで共有する際には、なぜ興味を持ったのかと学生に考えさせる質問をした。

2.5　結果

３つのクラスで大きなCan-doを達成することができた。小さなCan-doを達成するために、各教師がクラスによって扱う表現の難易度を変更したり、表現の確認を行ったりするなど工夫した。また、ときには英語を使用することも可能だった。そうすることで小さなCan-doも達成することができた。また、ペアやグループの活動が多かったため、学生がお互いに協力する場面が多かった。今回の実践では成績を付ける必要がなかったが、毎日のCan-do目標の振り返りプリント、作成したビデオ、他の学生からのビデオへのコメントが成果物として学生の手元に残った。

３．考察：報告者が学んだこと

報告者は以下の３点を本実践で学んだ。まず、今回のような短期留学生に対して授業を行う場合、短期留学全体のプログラムや教室以外での活動と結びつけることが授業内の活動につながるという学びがあった。本実践のビデオ作成にあたっては、留学プログラムで訪れた場所や学校の外から素材を見つけて、授業内で深く考えたり、そのテーマで日本語を使ったりするなど、外の活動とつなげることができた。授業外の活動と結びつけること、普段の授業ではなかなかできない活動を取り入れることで、学生も達成感が得られるのではないかと考えた。次に、理想的な活動を考えていても、時間制限や機材の状況によって実施できない場合もあるということを改めて学んだ。学生にとって身近なスマートフォンの動画を用いた活動を計画した。しかし、全てが計画通りにはいかず、当日のネット環境によって、データ共有の仕方を変更したり、ビデオの発表の仕方を全体発表からグループ発表に変更したりすることも必要であった。最後に、ティームティーチングでは大きなCan-do、小さなCan-doを設定することで、レベル差を超えて一貫性を持たせて授業ができることを学んだ。実践で教師３名は各クラスの活動については個人で検討したが、Can-do目標が共通していたため、一貫性を保てていたと考える。

４．おわりに

報告者は短期留学の一部に含まれる日本語授業にて実践を行った。実践を通して以下の３点を学んだ。短期留学全体のプログラムや教室以外での活動と結びつけることが授業内の活動につながること、時間の制限や機器の状況によって計画を変更する必要があるこ

と、大きなCan-doと小さなCan-doはクラス毎のレベル差を超えて一貫性を保てることである。

参考文献

中島永倫子・末永サンドラ輝美（2018）「ブラジル初等教育の「子どもCan-do」―「人を育てる」日本語教育をめざして」『国際交流基金日本語教育紀要』14、pp.19-34、https://doi.org/10.20649/00000664（2023年11月27日）

（いいづか　まお　早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程）
（きぬがわ　あきさ　早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程）
（ぶえの だ しるば じゅにおる・あんとにお まるこす
早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程）